

修士 (2017 年度)

コンテンポラリー・ダンスプレイヤーの社会学的考察 ——活動継続のための戦略——

猿田 かほる

第1章でまず、文化芸術活動の意義が認められ、活動実践の重要性への認識が高まっているにもかかわらず、現状ではそうした活動実践が積極的になされていない、あるいは活動実践が困難であるという状況を述べ、そのなかで、コンテンポラリー・ダンスプレイヤーたちがいかなる戦略で活動を継続して行っていくことができるのかについて明らかにすることを研究目的として設定した。1章2節では芸術生産の現場や労働におけるこれまでの先行研究について記述し、既存の研究では芸術生産をいかに制度的に行っていくかという視点が主眼であり、コンテンポラリー・ダンスのような実験的芸術領域においても文化政策による支援の重要性について述べるのみで、制度とは異なる施策で芸術生産を継続していく可能性について明らかにしているものはないことを述べた。そして、1章3節では日本においてコンテンポラリー・ダンス活動の継続を困難にしている要素として、仕事をめぐる困難、踊る場をめぐる困難、踊りをめぐる政治的な困難、の3つを挙げて論じた。

第2章では、クラシック・バレエなどの舞台芸術と比べて、プロフェッショナルとアマチュアの境界が不明瞭であるというコンテンポラリー・ダンスの担い手たちの構造について説明し、そうした担い手たちであるダンスプレイヤーが実演活動のみでは生計を立てていけないということを述べた。また、コンテンポラリー・ダンスプレイヤーの実態として、彼らに共通した内発的報酬を志向するという典型的「ハビトゥス」(Bourdieu 1980a, 1988b=1988, 1990)によって「労働選好」(Throsby 2010=2014)しており、活動により多くの時間を費やすために、進路選択においても同様に選好していることが分かった。また、ダンスプレイヤーたちの進路選択において、ダンス活動が出来なくなるということをどれほどリスクとしてとらえるかによってその後の“生き方”の選択に影響を及ぼしていることを記述した。さらに、商業ベースにのらない実験的芸術であるコンテンポラリー・ダンスの活動を実践するダンスプレイヤーたちの多くは自己言及的な「研究者型」の態度で活動に臨んでいた。

第3章では、1章3節で挙げた困難の要素がある状況の中で、ダンスプレイヤーたちの働き方における戦略と踊る場をめぐる戦略という視点から実際に彼らがどのように活動を継続して行っているのかについて記述した。働き方という戦略においては、コンテンポラリー・ダンス活動の継続のために、ダンス活動のみに専心せず非職業的に活動を行っており、活動を優先して行うために「労働選好」を行っている。仕事とダンスを両立して行うことの利点がある一方、彼らの活動には制約とリスクといった問題が生じていると考察した。踊る場をめぐる戦略においては、セッションハウスを事例に、コンテンポラリー・ダンス業界の内部から踊る場を「DiY 的」(毛利 2008)に形成する取り組みが行われており、コンテンポラリー・ダンスにおけるオルタナティブ・スペースであると考察した。

そして第4章では、ダンスプレイヤーたちの戦略を以てしても、コンテンポラリー・ダンス活動の継続が未だ困難な状況であることを指摘し、そうした困難が個人のレベルで生

じているものとしてではなく、社会全体の問題としてとらえるという視点から考察した。

そして第5章では、従来の研究では触れられてこなかった、コンテンポラリー・ダンスという実験的芸術における芸術生産の活動を戦略的に継続して行う意義について述べ、本研究の主張を整理した。これまでの研究において、実験的芸術領域における政策的支援は手薄であり（吉澤 2011）、そうした領域での芸術生産活動を継続して行うにあたって制度化の重要性が指摘されてきた（佐藤 1999）。しかし、本研究では、実験的芸術であるコンテンポラリー・ダンスを踊り続けていくことが困難な状況の中で、制度的視点ではなく、ダンスプレイヤーの戦略という視点から、いかにダンスプレイヤーが活動を継続して行っているのかについて検討してきた。そのような視点は、芸術生産の議論の中では抜け落ちていたものである。また、働き方の戦略において見てきたように、ダンス活動だけに専心するのではなく、ダンス以外の仕事をするのがダンスを行うことへのモチベーションとして働き、そうした戦略が、活動継続に対してよりいっそう相乗的な効果を生みだしているダンスプレイヤーの存在についても指摘した。彼らの活動実践は、従来の制度的に専心する芸術生産の活動実践とは異なっており、社会の制度との相互作用の中で芸術生産を行うという活動継続の新たな可能性を示唆している。芸術の制度の中でダンスプレイヤーが確立してゆくことも大事ではあるが、『「芸術という営み」は、必ずしも労働という概念に回収されるものではない』（吉澤 2011: 218）とあるように、生業としてではなく活動を行う一市民として、すなわち、社会制度の中の個人としてダンスプレイヤーをとらえることで、彼らの活動実践が既存の芸術活動実践に対するオルタナティブとして継続してゆける可能性として示唆された。

そして本論文の主張として以下の2点を挙げた。第1に、既存の研究に対して、芸術と社会との関係において制度的自律性を目指すことだけでなく、社会と芸術の相互作用について検討する視点を追加した。また、加えてダンスプレイヤーのように、社会制度の内部に潜在し、時に芸術制度側へと移動するという、制度間の活動実践者の流動性という視点が欠けていたことを指摘し、本研究の結論とした。

参考文献

- Abbing, Hans, 2002, *The Exceptional Economy of the Arts*, Amsterdam University Press. (=2007, 山本和弘訳, 『金と芸術——なぜアーティストは貧乏なのか?』 grambooks.)
- Bourdieu, Pierre, 1980a, *Le Sens Pratique*, Les Éditions de Minuit. (=1988, 今村仁司・港道隆訳, 『実践感覚 1』 みすず書房.)
- , 1980b, *Le Sens Pratique*, Les Éditions de Minuit. (=1990, 今村仁司・福井憲彦・塚原史・港道隆訳, 『実践感覚 2』 みすず書房.)
- 毛利嘉孝, 2008, 『はじめての DiY——何でもお金で買えると思うなよ!』 ブルース・インターアクションズ.
- 佐藤郁哉, 1999, 『現代演劇のフィールドワーク——芸術生産の文化社会学』 東京大学出版会.
- Throsby, David, 2010, *The Economics of Cultural Policy*, Cambridge University Press. (=2014, 後藤和子・阪本崇監訳, 『文化政策の経済学』 ミネルヴァ書房.)
- 吉澤弥生, 2011, 『芸術は社会を変えるか?——文化生産の社会学からの接近』 青弓社.